【農文協デジタル全集シリーズ】

『明治大正農政経済名著集』

全24巻（1975～78年刊）

内容概説・巻構成・収録論文一覧

＜目　次＞

・編者のことば「先人の思想に学ぶ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
・巻構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
・本文の直し方の特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
・完結にあたり・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
・収録論文一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
・刊行のことば「社会科学の原点に立ちかえって」・・・・・・・・・・7

一般社団法人 農山漁村文化協会

【編者のことば】

「先人の思想に学ぶ」

東京大学 名誉教授 武蔵大学名誉教授
近藤 康男

明治から大正、諸制度は一応近代化したが、社会の基底に古いものが残された。農村からの収奪によって日本資本主義は栄えたが、低労賃と農民の貧困は国内市場を狭め、ソシァルダンピングの商品輸出となり、ついに太平洋侵略戦争へ と続いた。禍根は農業軽視である。「古今東西、農業を忘れて商業貿易に立つ国にして亡びざるはなし」と喝破した先人の教訓を空しくしたからである。

戦後三十年、いま進行しつつある事態は、明治、大正時代に犯した誤りを拡大再生産しているのではなかろうか。資本蓄積は更に速く、農業の破壊は一層はげしい。軌道の修正がなくてはならない時である。

ここに明治、大正時代の先人の本を選んで発行することの意義は、広汎な人々がこの今日的課題を自分自身の課題として意識するのに役立つところにある。私は、採り上げる本を次のような考えで選んだ。

第一　農政経済に関した本といっても、広く農業、農村問題を社会科学的に接近しようとする本のなかの名著を選んだ。個別問題の研究か、総括的な著作かは問わない。

第二　主観的・観念論を排し、科学的に現実を直視する姿勢をもって、上からの「指導的」農政に対する批判的精神に充ちたものを選んだ。農民運動家の手になる本を加えたのも同じ意味である。

第三　選んだ二十冊をいかに読むべきかは、各巻の解題に任せたい。本シリーズが、現代の問題の正しい認識をしたいと考えている人達に、何かを与えるに相違ないことを告げて、編者の辞としたい。

【編集委員】
阪本 楠彦（東京大学）
村上 保男（埼玉大学）
梶井　 功（東京農工大学）

【巻構成】

第１巻　『興業意見』・『所見』

前田正名著／祖田修解題

殖産興業政策の基本となった『興業意見』を中心に前田正名の激しい情熱を傾けた論文を編成。

第２巻　『日本地産論』・『日本農業及北海道植民論』

フェスカ著／飯沼二郎・矢野武解題

近代農業の祖フェスカが日本の土性調査を中心に著した不朽の農書「日本地産論」他二著を収録。

第３巻『日本振農策』・『日本農民ノ疲弊及其救治策』

エッゲルト・マイエット著／桜井武雄解題

農業教師エッゲルト、マイエットの著書を収録。地租の重圧に悩む日本農業の行くべき途を示す。

第４巻　『信用組合論』（平田東助・杉山孝平著）

『信用組合論』（横井時敬・高橋昌著）

『産業組合法要義』（平田東助著）

『産業組合手引』（森近運平著）

伊東勇夫解題

明治中期、疲弊した農村救済のため論じられた信用組合のあり方についての議論をリアルに再現。

第５巻　『最新産業組合通解』・『時代ト農政』

柳田国男著／伝田功解題

明治 30 年代の基本問題を直視した若き農政学徒柳田国男による産業組合、農政問題への提言。

第６巻　『日本尊王論』・『日本農政学』

川上肇著／石渡貞雄解題

マルクス主義経済学者として著名な川上肇が論壇に登場した当時の「日本尊王論」「日本農政学」を収録。

第７巻　『農業本論』

新渡戸稲造著／崎浦誠治解題

明治中期、日本人の手によってはじめてまとめられた農政学の原典。農業の位置づけを評価。

第８巻　『農業経営学』

伊藤清三著／金澤夏樹解題

わが国農業経営学の最初に体系づけられた書。農業経営の基本的なあり方を的確に指摘する。

第９巻『実地経済農業指針』・『日本農業の経済的変遷』

斎藤萬吉著／須々田黎吉・武田勉解題

百姓の生神様といわれた斎藤萬吉が実証的に分析した明治期農業の姿。幻の名著二冊を復元する。

第 10 巻　『土地経済論』

河田嗣郎著／阪本楠彦解題

土地の経済的性格について体系立てて論じたわが国はじめての書。地代論、土地価格論など。

第 11 巻　『産業組合講話』

佐藤寛次著／近藤康男解題

協同組合の思想を整理して、実務者むけに具体的実践に結びつく手引書として示した好書。

第 12 巻　『農村救済論』・『農村革命論』

横田英夫著／山崎春成解題

農本主義を説き、のち農民運動に投じた著者による檄文。農業保護策の姑息性を糾弾する。

第 13 巻　『小農保護問題』

社会政策学会編／大内力解題

大正 3 年に開かれた社会政策学会での大農、小農をめぐる迫力ある討議全文を収録する。

第 14 巻　『適産調要録』・『老農晩耕録』

石川理紀之助著／斎藤之男解題

貧村の更生に 70 年の生涯を傾けた老農石川理紀之助の代表的著作とすぐれた実践記録を収録。

第 15 巻　『永小作論』

小野武夫著／細貝大二郎解題

豊富な経済史実を鋭い史眼で分析する。永小作慣習と明治民法での土地所有の矛盾をつく書。

第 16 巻　『農村法律問題』

末広厳太郎著／渡辺洋三解題

大正末期、新進の法学者として活躍した著者による部落有林から小作争議までにわたる批判論究。

第 17 巻　『第壹農業時論』

横井時敬著／村上保男解題

明治大正期官学派の農学者である著者が、該博な知識から農業のあり方、農業改良を論ずる。

第 18 巻　『農民運動の理論と実際』・『農民運動と高松事件』

杉山元治郎・若林三郎著／大島清解題

日農創設者による農民組合の講話集と高松事件での農民の警察と裁判に対する闘争の記録。

第 19 巻　『明治大正農村経済の変遷』

高橋亀吉著／暉峻衆三解題

維新後、大正末期までの農村経済の推移を国民経済との関連のもとにデータを駆使し論述する。

第 20 巻　『世界農業史論』

佐藤昌介・稲田昌植著／高倉新一郎解題

日本、中国、独逸、英国、仏国、米国m￥など、各国の農業史を広い識見をもとに、詳細に解説。

第 21 巻　『農村問題と社会理想』・『公正なる小作料』

那須皓著／渡辺庸一郎解題

大正末期、小作料をめぐって論陣を張った著者の理念。理想主義者による文明論を展開する。

第 22 巻　『農村自治の研究』

山崎延吉著／綱沢満昭解題

農聖山崎延吉による「農民の社会地位向上、地方自治の充実」の主張。農本主義思想の一典型。

第 23 巻　『米と社会政策』（J.A.ラビット著）・『養蚕労働経済論』（早川直瀬著）　牛山敬二・暉峻衆三解題

大正期、わが国農家経済の基軸であった米と養蚕をめぐる社会経済的分析による古典的名著。

第 24 巻　『明治農業論集』

幸徳秋水他著／暉峻衆三他解題

『本邦地租の沿革』（有尾敬重著／暉峻衆三解題）、『地租増否論』・『続地租増否論』（谷干城・田口卯吉著／暉峻衆三解題）、『地租全廃論』（円城寺清著／暉峻衆三解題）、『全廃論を読む』（幸徳秋水著／暉峻衆三解題）、『時事要論』（大井憲太郎著／牛山敬二解題）、『土地均亨人類の大権』（宮崎民蔵著／牛山敬二解題）、『土地国有論』（西川光次郎著／牛山敬二解題）、『農民の福音』（赤羽一著／牛山敬二解題）

明治期に華々しく展開された地租、土地所有をめぐる論争。谷干城、幸徳秋水、赤羽一など。

※　※　※　※　※　※

【本文の直し方の特徴】

1、旧漢字は特殊な固有名詞を除いて当用漢字になおしてあります。

2、難かしい語句にはルビを付して読みやすくしてあります。

3、漢文については読んで意味がわかるように意訳したルビを付してあります。

4、原文がカタカナのものはひらがなに、濁音にすべきところは濁音に、句読点のないものは句読点を補ってあります。

5、読者の理解に必要な文献や注記を適宜掲示してあります。しかも原著書の構成、文体、用字は尊重し、そのまま引用できるように便宜をはかってあります。

これらによって、学生、研究者はもちろん、一般の読者にもひろく読めるよう、わかりやすく編集してあります。

（農山漁村文化協会）

【完結にあたり】

近藤 康男

『明治大正農政経済名著集』二十四巻を完結するにあたって、多数の読者の御支持と、出版のために直接間接御協力頂いたかたがたにお礼申し上げたいと思います。あの企画をひきうけたときの私の心境を申せば、戦後三十年、経済成長政策に従属した農政は、かえって農業破壊の手段となり、人心の赴くところ、すべて「古今東西、農業を忘れて商業貿易に 立つ国にして亡びざるなし」と喝破した先人の教訓が忘れ去られようとしている現状への反発でありました。

実際、明治・大正日本経済の発展は、農村からの収奪の上に行なわれました。そのために、国内市場は必然的に狭く、商品の海外へのソシァル・ダンピングとなり、昭和恐慌・太平洋侵略戦争へとエスカレートして崩壊したことは誰しも認めるところでありますが、その根因は国内農業の疎外にあったと思います。

戦後三十年、貿易を主軸とする経済のあり方は、輸出品目こそ繊維から鉄鋼・電機にかわったとはいえ、侵略戦争直前の日本経済のあり方と、あまりにもよく似ているといえないでしょうか。農村からの収奪は拡大再生産され、単に労働力が農村から奪われただけでなく、土地も水も空気までもが奪われつつあります。

ここに選んだ四十一人の先人、その発言はいろいろであるが、心を僭めてこれを聴くとき、いずれもが「真の隆盛に赴く国民経済は、つねに、安定した農業の基礎に支えられる」ことを明治・大正期に述べているのだと思います。それは、今日の日本経済は軌道修正せねばならないと告げるものでもあります。この今日的課題を広範な人々の意識に定着させるのが、本集の任務であったのであります。

本集発行については、各巻に解題をお願いした研究者のかたがたをはじめ、月報・口絵写真などに御寄稿頂いた著者の縁者、その他側近のかたがたの御協力をえたことを申添えてお礼を申し上げます。月報は、もとより農文協編集担当者の実務活動の副産物でありますが、各名著のもつ背景を、解題とは別の側面で、浮き彫りにする貴重なものを多く含んでいます。この作製に対する担当者の態度も熱心であって、たとえば杉山孝平の経歴を追求し、その巻の発刊順序を再三にわたって変更し、ついにその目的を達したごとき、私のひそかに敬服しているところであります。

このようにして、『明治大正農政経済名著集』は完結しましたが、これを同じ問題意識で延長し、『昭和前期農政経済名著集』を引き続いて刊行することになりました。多くの読者の御支持と、多数の御協力を期待しているものであります。

（1977 年 11 月 第 24 巻月報より）

【収録論文一覧】

第１巻　興業意見・他

76.06　A5　436　3,090 円　4-540-76005-X

『興業意見』

前田正名著 解題 祖田修

本書は前田正名が在官中、明治 17 年に編纂し殖産興業政策の基本となったものである。のち野にあって「前田行脚」による農工商の調和のとれた地域計画運動に傾けた激しい情熱の基底となるもので、近代日本経済史上独特の光彩を放っている。明治初期の近代化の姿と呻吟する農村の実態が浮彫りにされる。

『所見』

前田正名著解題 祖田修

「所見」は、前田正名の著作の中でも最も体系的かつ鋭角的な見解を吐露したもので、激しい調で彼の基本的な主張を述べている。次第に産業政策の主流をなしてきた一部特権政商の大工業育成偏重政策を批判し、農業や固有工業など在来産業の優先近代化を明確に打出し、家族社会観基調のナショナリズムを強調する。

第２巻　日本地産論・他

77.01　A5　420 頁　3,605 円　　4-540-76036-X

『日本地産論』

フェスカ著　解題 飯沼二郎

近代農業の祖フェスカが招かれて駒場農学校で教べんをとったのは明治 15 年、以降わが国の土性調査を中心に北海道から鹿児島にいたるまで足跡をのこし、調査と研究に費やし、実地指導にあたった。そのぼう大な記録は、不朽の農書「日本地産論」におさめられる。フェスカのすぐれた農業指導の基となった書である。

『日本農業及北海道殖民論』

フェスカ著　解題 矢島武

明治21年､時の井上農相や山縣内相の命を受けたフェスカは、東北と北海道を巡回、その復命書として著したのが本書である。「北海道では 10 町歩規模の有畜輪作農業を創設して漸次日本農業の面目を一新すべきだ」と説く。これはフェスカの大農論であるが、単なる観念論に終わらず長期的予測のもとに立論している。

第３巻　日本振農策・他

75.11　A5　328 頁　2,575 円　　4-540-75020-8

『日本振農策』

エッゲルト著　解題 桜井武雄

本書はエッゲルト来日 3 年後の明治 23 年に著された。当時の農村の進歩改革を妨げる最大の障害を「封建時代の遺物たる過重な地租」とみたエッゲルトは、国家の扶助誘導によって耕地を 3 倍に拡大し、地租を三分の一にして農村を国内市場として開発することを提唱した。論旨明快な日本近代化論の一提案である。

『日本農民ノ疲弊及其救治策』

マイエット著　解題 桜井武雄

明治政府の財政的基礎であった高率の地租負担にたえかねた農民は、地改正によっていったん手にした土地を手放すことが多かった。明治 8 年に来日したマイエットは、「疲弊せる 日本農民の代弁者」の立場で、その原因を究明し救治策を述べたのが本書である。今日の農業の窮状をみるとき、 改めて本書の価値が出てくる。

第４巻　信用組合論・他

77.04　A5　376 頁　3,090 円　　4-540-77001-2

『信用組合論』

平田東助・杉山孝平著　解題 伊東勇夫

わが国における最初の「信用組合法」が提案される 11 日前に発刊された本書は、同法案の最初の解説書、啓蒙書であり、同時に信用組合についてのわが国最初の体系的著作で、杉山がドイツでみたシュルツェ方式に立つ。商人資本を駆逐せんとする意図は、新たな収奪におびやかされている今日の農村に通じるものがないか。

『信用組合論』

横井時敬・高橋昌著　解題 伊東勇夫

本書は、明治 24 年に提出された信用組合法案に対する反対の烽火である。小農金融を主眼とする信用組合が実効をあげるためには信用組合法案が下敷きとしている出資制と利益配当正義のシュルツ方式でなく、持分制を排し利益配当を行なわないライファイゼン方式でなければならないというのが、その論拠である。

『産業組合法要義』

平田東助著　解題 伊東勇夫

資本主義の荒波が農村にも及び､「劣者いよいよ劣に至る」情勢必至のとき、これを救済するために「産業組合法」が明治 23 年に成立した。本書は同法の起草者平田が自ら法案を逐条的に解説し、産組の設立、運営のしかたを述べたものである。小農の培養に力を注ぐ平田に明治絶対主義官僚の心情を読みとることができる。

『産業組合手引』

森近運平著　解題 伊東勇夫

「今の世に最も切要なる貧者自助の法」としての産業組合を普及するために参考書として書かれたもの。組合の設立、運営のしかたから帳簿のつけ方まで、平易にその要領を述べたわが国ではじめての農民的農協論であり、実務の手引となったものである。森近はのち大逆事件に連座したとのでっちあげで死刑に処せられた。

第５巻　時代ト農政・他

76.08　A5 判　358 頁　3,090 円　　4-540-76019-X

『最新産業組合通解』

柳田国男著　解題 伝田功

産業組合法公布の 3 年後に出された本書は、明治初年以来の輸入農学と伝統的な小農正義農学に対して、西洋学と豊かな見聞とを土台として、現実性と合理性のある農政論を展開したものである。 豊かな知性を秘めつつも輸入農学を模倣することなく現実を直視し、そこから立論する学風に若き日の柳田をみることができる。

『時代ト農政』

柳田国男著 解題伝田功

本書には、明治 45 年産業組合講習会での講演「日本に於ける産業組合の思想」と明治 39 年報徳会での講演「報徳社と信用組合との比較」の二編が収められる。前者からは日本の産業組合思想をたどる中に柳田の歴史観がうかがわれる。後者は当時勢威を誇っていた報徳社にのりこんで、直接その農本主義を批判したもの。

第６巻　日本尊農論・他

77.05　A5 判　624 頁　4,635 円　　4-540-77006-3

『日本尊農論』

河上肇著　解題 石渡貞雄

思想家、マルクス主義経済学者として著名な河上肇の若いころの著作。「国威の発揚は商業の隆盛を来し、商業の隆盛は農業の頽廃を招き、而して農業の頽廃は遂に国家転覆の原由たるに至るは、古今実にその軌を一にする所なればなり」とし、民族の自立にとって農業の尊ぶべき理由を主張する。

『日本農政学』

河上肇著　解題 石渡員雄

「日本尊農論」の主張をさらに展開、農業の概念を幅広く述べたあと、農政学の学問としての位置づけを明確にする。とくに第二編「農業理想論」で は、維新前後の貴農主義を評価し、明治 30 年代の賤農風潮をきびしく批判する。農業の生産要素、農業技術のあり方、農地論、金融論なども体系立てて論じた快著。

第７巻　農業本論

76.01　A5 判　496 頁 4,120 円　　4-540-75032-1

『農業本論』

新渡戸稲造著　解題 崎浦誠治

明治中期、日本人の手によってはじめて体系的にまとめられ、札幌農学校において講義された農政学の原典。食糧源としての農業・農村を大きく評価し、 人間、自然、社会の三視点からみた農業についての諸学説を概括、また「農を軽視して商工の発達なし、商工のみの発達は帝国主義の弱肉強食となる」と結語する。

第８巻　農業経営学

76.04　A5 判　418 頁　3,090 円　　4-540-76001-7

『農業経営学』

伊藤清蔵著　解題 金沢夏樹

明治 41 年に刊行され、わが国農業経営学の最初に体系づけられた書。第一篇 農業の要素、第二篇 農業の組織、第三篇 農業の管理よりなる。とくに経営の基本は経営方式であり、その内容は、生産諸装備、土地利用方式、地力維持方式の決定であるとの主張は、市場価格への適応に走りがちな現代経営学への批判でもある。

第９巻　実地経済農業指針・他

76.02　A5 判　612 頁　4,635 円　　4-540-75034-8

『実地農業経済指針』

斎藤萬吉著　解題 須々田黎吉・武田勉

百姓の生神様とまで謳われ、脚絆足袋に編笠かぶりの老農然たるいでたちで駒場農学校農業監督、農事試験場の技術者などの経歴をもつ斎藤萬音は、明治中期の日本農業を農家の実態をもとに実証的、実践的にときほぐした。本書は農政、農地の基本的な視点を論じたあと、農民の生産への努力すべき道すじを明快に述べる。

『日本農業の経済的変遷』

斎藤萬吉著　解題 須々田黎吉・武田勉

斎藤萬吉の遺稿集を編さんした書。筆者の鋭い分析力、高い着眼点、農業・農民への情熱が全編にみなぎる。農村社会、米価、農地問題、栽培経済論、農民教育への提言が展開され、明治中後期の農業問題の論点が浮彫りにされる。とくに本書では斎藤萬吉の農業実践の思想ともいうべき論文を元原稿から新発見し収録する。

第１０巻　土地経済論

76.09　A5 判　512 頁　4,120 円　　4-540-76020-3

『土地経済論』

河田嗣郎著　解題 阪本楠彦

土地の経済的性質について体系立てて論じたわが国はじめての書。地代論（地代論の発達、地代の 発生、地代の壊滅、地代の本性、特殊地代）、土地価格論、土地増価税より土地公有論にいたるすこぶる多方面に及ぶ理論を展開し、土地政策を論じる。基底に「土地は万物の母なり」という愛情がこめられている。

第１１巻　産業組合講話

76.10　A5 判　396 頁　3,090 円　　4-540-76021-1

『産業組合講話』

佐藤寛次著　解題 近藤康男

佐藤寛次は協同組合の思想を整理して、わが国の諸条件のなかで体系づけた。本書は、組合数 1 万 4000、組合員 500 万、組合の利害関係者 2500 万という大正初期に各種産業組合の設立、管理、運営などの手続きを詳述したもの。昭和 5 年に発行された「信要組合論」とともに産組運動に従事するものの指導書であった。

第１２巻　農村革命論・他

77.02　A5　376 頁 3,090 円　　4-540-76037-8

『農村救済論』

『農村革命論』

横田英夫著　解題 山崎春成

「著者は一農民なり、本書は尋常の著述にあらずして一種の檄文なり」という著者は、秩父に生まれ、 農本主義を説き、のち農民運動に転じた。「農村革命論」（一部本書に収録）と並ぶこの著作は、大正初期の農民疲弊の惨状を訴え、産業組合や農業保護策は姑息な対症療法であるとし、土地制度の改革を注張している。

第１３巻　小農保護問題

76.05　A5 判　320 頁　2,575 円　　4-540-76004-1

『小農保護問題』

社会政策学会編　解題 大内力

大正 3 年 11 月、東京で開催した社会政策学会で、大農、小農論をめぐって大激論が展開された。本書は、その討議、講演、研究報告の記録である。 高岡熊雄、横井時敬、矢作栄蔵、添田寿一、津村秀松など斯界の権威者たちの熱気のこもった討議は迫力がある。とくに経済学者福田徳三の農業経済学への痛烈な批判は鋭い。

第１４巻　適産調要録・他

76.11　A5 判　300 頁　2,575 円　　4-540-76022-X

『老農晩耕録』

石川理紀之助著　解題 斎藤之男

「寝ていて人を起こすなかれ」の信条を文字通り実践した老農石川理紀之助による秋田の一貧村九升田部落での更生指導の実践記録。農業のあり方、農民の生き方についての主張一労働の習慣、節約、風俗改良は、石油文明に浮かぶわが国の今日の農業とわれわれの生活への的確な批判にも通じるものである。

『適産調要録』

石川理紀之助著　解題 斎藤之男

「適産調は部落一切の調査にして、人体に於ける医師の診察の如し」というように、岩石、土壌から地勢、被害にいたるまでの細かい調査を提唱・実践したものである。これをもとにした「適産調将来心得」は、いわば部落ごとの総合計画で、石川理紀之助の最大の仕事とされている。今日的意義の大きい基本視角を示す。

第１５巻　永小作論

77.03　A5 判　352 頁　3,090 円　　4-540-76038-6

『永小作論』

小野武夫著　解題 細貝大次郎

材料の豊富精密さ、かくれた経済史実を奥底まで看破する鋭い史観で農村の社会経済史に幅広く活躍した小野武夫の永小作旧慣習と明治民法での土地所有との矛盾をつく研究。以下福田徳三の序文より。「本書の如く該博に又た詳細に永小作のことを取扱ったものは、未だ是あるを見ない。法律、 経済、小作争議関係者必読」

第１６巻　農村法律問題

77.07.　A5 判　251 頁　2,575 円　　4-540-77019-5

『農村法律問題』
末弘巌太郎著　解題 渡辺洋三
大正末期、末弘巌太郎は新進の法学者として時勢の要求に応じて労働法や小作立を批判論究し、法学会に新分野を開拓した。本書は「農村の人々の為めに又農村を憂ふる人々の為めに比較的理解し易き形式を以て、農村に法律の知識を領ち拡めむ」(序文より）とする動機で書かれ、部落有林から小作争議まであふれている。

第 17 巻　第壹農業時論・他
76.03　A5 判　456 頁　3,605 円　　4-540-75035-6
『第壹農業時論』
横井時敬著　解題 村上保男
横井時敬初期の著作で明治 38 年刊。随想風に著者の農業観を展開し、農政のあり方、農商務省や農業中央会議の位置づけ、農業金融、農業組合論 から耕地整理・用水施設など農事改良にいたるまで論じる。とくに当時の自由主義風潮、利己主義に走る傾向をいましめ、信用組合万能論を縦横に斬る。著者の独自な立場が窺える。
『農村行脚三十年』
横井時敬著　解題 村上保男
明治大正期の官業派の代表的農学者であり農本主義者である著者は、耕種稲作農業を基調に幅広く活躍した。本書は、その南船北馬、万般の農業問題についての講話の筆録である。反資本注義、反社会主義の独自な立場が窺われ、「農家連盟」設立 の必要性にも説き、首尾一貫した姿勢・主張で貫かれている。

第 18 巻　農民組合の理論と実際・他
77.06　A5 判　336 頁　3,090 円　　4-540-77009-8
『農民組合の理論と実際』
杉山元治郎著　解題 大島清
日本農民組合の創設指導者の一人である杉山元治郎が、農民のために非常にわかりやすく、たとえ話などもまじえながらまとめた農民組合についての講話集である。農民組合結成の必要性、運動の具体的な組織づくり、意識改革の重要性、戦術戦略の実際など、その情熱を傾けた書で、この考えを基調に連動の輪がひろがった。
『農民運動と高松事件』
若林三郎著　解題 大島清
高松事件は五大小作争議の一つで、農民運動としてはわが国はじめての刑事事件。でっち上げにより仕組まれた。著者は本事件の弁護士の一人で、本書では事件の発端、鑑定内容、検挙、投獄の過程など、残酷をきわめた事件の実態がリアルに克明に記録され、大正期にひん発した小作争議での無産農民の抵抗の強さを示す。

第 19 巻　明治大正農村経済の変遷
76.07　A5 判　372 頁　3,090 円　　4-540-76018-1
『明治大正農村経済の変遷』
高橋亀吉著／暉峻衆三解題
維新後、大正末期までの農村経済の推移を克明な資料をもとに分析する。維新後の発展、日露戦後の停滞、欧州戦後の農村経済のゆきづまりをみて、農村経済改善の方向を探る。本書に対する野呂栄太郎の批判から日本資本主義論争が展開されたことは有名。巻末の豊富な資料は当時の農業を研究する者にとって貴重。

第 20 巻　世界農業史論
76.12　A5 判　384 頁　3,090 円　　4-540-76023-8
『世界農業史論』
佐藤昌介・稲田昌植著　解題 高倉新一郎
佐藤昌介は札幌農学校の第一回卒業生で、のち同校の教授、校長、北大総長となった。明治 20 年代に主張した「大農論」は有名だが、その背後に本書で著される世界史的な広い識見があった。日本、独逸、英国、仏国、米国などの各地での農業史を詳細に解説し、問題点を大胆に指摘している。

第 21 巻　農村問題と社会理想・他
77.08　A5 判　320 頁　3,090 円　　4-540-77021-7
『農村問題と社会理想』
那須皓著　解題 渡辺庸一郎
明治末期から大正年代にかけて日本の社会、経済、 思想、政治の激しくゆれ動いた時代に、著者は当時の農村問題の本質を世界の文明問題として把え、すすんでその解決策を論究した。社会理想の核心としての農業の社会化という指導理念のもとに、都市と農村との調和ある新文明論の展開は、当時の識者に大きく訴えた。
『公正なる小作料』
那須皓著　解題 渡辺庸一郎
大正末期、小作運動が弾圧され、小作制度調査会もデッドロックに当面していたとき、東大教授那須皓の「公正になる小作料」という発想が当時の地主階級を脅かし農民運動家を勇気づけた。そして「日本の小作農は実質において農業労働者だから、労働者なみの団結権、争議権を与えよ」との国際労働会議条約の基となった。

第 22 巻　農村自治の研究
77.09　A5 判　624 頁　4,635 円　　4-540-77022-5
『農村自治の研究』
山崎延吉著　解題 綱沢満昭
第一次世界大戦から昭和初年の農業恐慌に至る時期、愛知県安城農林学校校長の山崎延吉は碧海郡の農村を「日本のデンマーク」と呼ばれた先進地区となした指導者だった。延吉の信条は、資本主義に目覚めた農民への教育で、「農民の社会的地位を高めよ、そのためには地方自治に実体をもたせよ」というものである。

第 23 巻　米と社会政策・他
78.10　A5 判　468 頃 4,120 円　　4-540-77036-5
『米と社会政策』
ラビット著　解題 牛山敬二
ラビットはアメリカ大使館商務官。大 17 年 1 月から 13 か月間にわたって米を中心にした社会変動「米騒動」をリアルに描き出し客観的に論評、対策を考えた。そのまとめが本書で、論旨明快、鋭い分析が光る。徹底した実証主義的手法を用い、背景にある政治、社会、経済の動向を指摘。米騒動の生々しい記録である。
『養蚕労働経済論』
早川直瀬著　解題 暉峻聚三
著者は、上田蚕糸専門学校の教師で養蚕経済を専攻した。本書は養蚕をめぐる労働力、経済関係を整然と社会科学の視点から解明した古典的名著。「養蚕は季節的労働需要を大量に必要とし、そこに雇用労働が漂泊的に集まった」実態を詳細に解明する。

第 24 巻　明治農業論集
77.11　A5 判　520 頁　4,120 円　　4-540-77056-X
『本邦地租の沿革』
有尾敬重著　解題 暉峻衆三
「地祖の神様」といわれ、近代日本の発足時の画期的事業であった地改正に維新政権の官僚として通暁していた有尾敬重の不朽の名著。地租改正事業のため日本の全土を東奔西走、実務の理論に通じた著者が、改正の準備、実施、結果について具体的かつ整然と記述する。地租改正の実態をいきいきと伝える書。

『地租増否論・続地租増否論』
谷干城・田口卯吉著　解題 暉峻衆三
明治 30 年代初期、当時「わが国政治界における近年稀有の大問題」とされた地租増徴案をめぐっての二人の論客の華々しい論議の再現。谷は地租増徴について土地所有者の立場から強硬に反対、対して田口は自由主義経済の立場から「借地料は土地に存する浮利」とし、増租の至当性を力説する。天下を湧かせた大論戦。
『地租全磨論』
円城寺清著　解題 暉峻衆三
『全廃論を読む』
幸徳秋水著　解題 暉峻衆三
明治 30 年代初頭、日清戦後の財政膨張を地租増徴でまかなおうとする政府の方針に対し、ジャーナリストとして名を馳せた円城寺清は「地租を全廃し、国税から地方税にせよ」と主張した。幸徳はそれに対し「地上の利益につながる」と一つずつ整然と論ばくする。二人の論は基本的には土地私有の可否に帰結する。
『時事要論』
大井憲太郎著　解題 牛山敬二
「所有権の内にて土地に関するものは、当の所有権にあらざる事是れなり、何故に土地の所有権は不正なりと云ふか」との問題提起から自由民権運動の士、大井憲太郎が論ずる土地国有論。「土地は天与の財産、土地平分の要」を主張する。松方デフレ以降のわが国の疲弊、惨状の一要因解決のため論じた著作。
『土地均享人類の大権』
宮崎民蔵著　解題 牛山敬二
小地主ないし農民の急進的小ブルジョア的要求を代表した土地所有論。「人間は天造物得有の権利＝享有権利と、人造物得有の権利＝所有権利」をもっているが、労働にもとづく後者の権利は決して犯してはならない、土地所有を平均化すべきでないとする。土地復権同志会を組織し実践した著者による地所有論。
『土地国有論』
西川光次郎著　解題 牛山敬二
明治期の代表的な社会主義者西川光次郎により著された啓蒙的内容の土地国有論。農村の社会問題の一つとして「土地問題」をとりあげ、それが「土地国有」さらに「社会主義」によって最終的に解決することを示した書。土地私有の弊害、農民困苦の原因を論じ、農民救済の方法として土地国有、社会主義化を提起する。
『農民の福音』
赤羽一著　解題 牛山敬二
無政府主義者赤羽一による土地所有論。本書は発刊と同時に発禁となった。土地は「人類全体の共有物であり、地主が占有しているのは正義の目からみて土地泥棒であり、土地泥棒を革命の断頭台に上して原始共産制の昔に還らねばならない」とし、無政府共産の自由安楽郷を造るため、小作農の団結、蜂起を呼びかける書。

※　※　※　※　※

注）各巻に記載されている発行年月、版型、頁数、定価、ISBN コードは冊子版のもの。

【刊行のことば】 社会科学の原点に立ちかえって

社団法人 農山漁村文化協会

明治から大正にかけての日本における社会科学の理論的水準は、必ずしも 高いものではなかった。しかし、それは今日的学問の視点からの評価にすぎない。むしろ現代の学問がかかえている諸矛盾、克服できないでいる諸問題の視点からみると、明治大正期の学問のほうに現状克服のすぐれた方法を見出すことができると思われる。

現代の学問が専門分化し、総合性を失い、社会的課題に適切に応える能力 を喪失しているかのようにみえる各種の現象をみるとき、今日ほど原点に立ちかえって学問それ自体をとらえなおす必要性を痛感するときはない。

この名著集では、主観的・観念論的著作は省き、もっぱら科学的に現実を考察した批判精神に充ちみちた名著だけを選択していただいた。これは近藤康男先生のご意見によるもので、先生は他の委員の方々とともに、自ら万巻のなかから、今日「原典」たるにふさわしい名著の選択に当たられた。

農業論、農政学、農業経済学、農業経営学といった基礎的分野の原典にとどまらず、協同組合、農業共済、農業法律、農業適正規模、農林統計、農村調査、農民指導、農民運動など、各専門分野の原典を網羅し、およそ近代日本の社会科学の創生期における思想体系を把握できるように全体を構成した。

若き研究者におかれては、入手困難のため、繙読の機会を失していた著書も少なからず含まれていると思う。「外国の諸文献を研究することも必要にはちがいないが、今日あまりにも日本の先人の業蹟に対する認識が不足していると思う。本名著集が、いささかでも先人の業蹟に対する認識の不足を補うところがあれば幸いである。

（1975 年 10 月）